

琉球大学学術リポジトリ

身体・関係・共同の創造と班共同制作活動 ースラ
イドづくりにおいてー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2007-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1082

身体・関係・共同の創造と班共同制作活動

— スライドづくりにおいて —

藤原 幸男

Formation of Body and Relation through Cooperative Group Learning
— in Making Slide Work —

Yukio FUJIWARA*
(Received April 28, 1994)

はじめに

さきに、『琉球大学教育学部紀要』第40集(1992, 3)において、「『視聴覚教育』におけるスライドづくりの実践」について報告した。そこでは、スライドづくりの過程について説明し、その過程を経て制作されたスライド作品を紹介し、学生の学んだことを述べた。主として、視聴覚教育の視点からスライドづくりの取り組みについて評価し、考察した。その結果、学生たちは見えないうところでさまざまなことに取り組み、予想以上に視聴覚教育的経験をしていることがわかった。

このスライドづくりでは、班で一つのテーマを決め、一つの作品を共同して作りだすことを求めた。そこでは、当初硬かった班員同士の心と身体を追求主題を介して関係づけ、交流し、響き合わせて、各人の持ち味を発揮して共同で一つの作品を作りだすことが求められる。そういう点からすれば、視聴覚教育的経験の獲得という視点の他に、もう一つ、身体・関係・共同の創造という視点から班共同制作活動の動態を明らかにし、班共同制作活動において身体・関係・共同創造が拓く可能性を明らかにする必要がある。

スライドづくりの過程は、①テーマへの知的追求・構想、②知的追求・構想の作品化、の過程からなる。この二つの過程に、③心と身体の関係・共同は関与する。①テーマへの知的追求・構想にもなって、③心と身体の関係・共同が生じるが、

逆にいえば、③心と身体の関係・共同が十分に成熟しなければ①テーマへの知的追求・構想は展開しない。①テーマへの知的追求・構想、およびそれともなっている③心と身体の関係・共同が十分に展開しなければ、②知的追求・構想の作品化はうまく働かない。こうしてスライドづくりの過程において、③心と身体の関係・共同をどう作りだし高めるかが一つの鍵になる。この点で、従来共同制作活動において班での協力が大事だとされてきたが、そこでの心と身体の関係・共同の動態はあまり解明されていない。

本報告では、1993年度後期に行った「視聴覚教育」講義において、学生がスライドづくりの過程を振り返って書き留めたレポート「スライドづくりに取り組んで」にもとづいて、班での①テーマへの知的追求・構想、②知的追求・構想の作品化、と密接に関連づけて、③心と身体の関係・共同の創造、の動態を述べていくことにする。学生たちのレポートは回想をもとにしているために記憶ちがいもあり、叙述の濃淡もみられるが、班のレポートを互いにつきあわせると、かなり実像に近いものができあがる。レポートのつきあわせをとおして、上記の動態を明らかにすることが可能になるように思われる。⁽¹⁾

なお受講学生は32名であり、班は、原則として所属学科が複数名になるように配慮して、授業担当者で前もって編成した。1班は8名(社会学科〔心理〕3名・小教〔理科〕2名・小教〔社会〕

* Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.

3名の混合班、男3名、女5名）、2班は8名（総合科学〔情報教育〕2名・小教〔教育学〕6名の混合班、男6名、女2名）、3班は8名（小教〔社会〕7名・理学部海洋学科1名、男6名、女2名）、4班は8名（小教〔教育学〕7名・聴講生1名、男3名、女5名）であった。

1. スライドづくりの説明と班編成

ほとんどの学生はスライドづくりは初めての経験であり、スライド制作過程には細かな大変そうな仕事がたくさん含まれていることを知り、また過年度学生の制作したすばらしい作品を視聴してこんな良い作品ができるか不安な気持ちでのぞんだ。だが、所属班のなかに友だちがいることを知り、不安がやわらげられ、安心感をもち、「なんとかなりそう」という気持ちをもちはじめている。

1班

学生たちはこれまでスライドづくりに取り組んだことはほとんどない。スライドづくりの過程と細かな手順を聞いて、「本当にやるのかと、少し嫌だった」「結構むずかしそう」「手間がかかりそう」「不安」という感想がまず浮かんでいる。しかし、1班は心理学（3名）・理科（2名）・社会（3名）の混合班で、「同じ学科で顔見知りのひとが一緒だったので安心した」とか、「まんざら知らないひとばかりではなかったので少し安心した」という感想がでている。顔見知りの人と一緒にやれるということで、不安を少しやわらげている。

2班

1班と同じく、「実際ビデオ（—制作過程を解説したビデオ、引用者注）を見て、こんなに大変な作業を自分たちができるのか、本当に一つの作品ができあがるのだろうか、最初から不安であった」が、「班編成されたメンバーで集まってみるとみんな知り合いだったので、すぐにうちつけ、『これからみんなでがんばってスライドを作ろう』と一致団結した」とある。この班は教育学と情報教育の学生の混合班で、互いによく知っていた。そのためもあって、「スライドをつくるには良いメンバーが集まった」と思った人があり、「良い作品がつかれる!」と直感した人もいたほ

どである。

3班

「先輩たちの作品のように、すばらしいものを作成していけるだろうかと不安に思った」人もいるが、「ずっと楽しみにしていた」「おもしろそう」という期待の気持ちでみているひとも何人かいた。この班は社会科の学生がほとんどで、そこに理学部・海洋学科の四年生が一人いて、非常にリラックスした雰囲気であった。このような雰囲気が安心感をつくりすぎ、緊張感を欠き、あとで手痛い失敗を味わうことになる。

4班

この班は全員教育学の学生であり、互いによく知っていた。「本当に自分たちで作れるのか、半信半疑」の人もいたが、「大丈夫」といった感じが強かった。

2. テーマの模索・決定

テーマの決定にあたっては、直接的には明示されていないけれど、食べてみたい、演奏してみたい、作ってみたいというパフォーマンス的的身体欲求が基盤にある。この身体欲求を基盤として、テーマの知的追求がはじまっている。とくに、沖縄出身学生にとって、見なれたモノにひそむ謎を本土出身学生の側から指摘され、「どうして?」という問いが生まれ、それが知的追求の原動力となっている。ただし、それがすぐ決定にまでいたらない。男子学生と女子学生の興味傾向のちがいが、発言力の強弱、おもしろそうなものか取材の簡単なものかという追求方向での葛藤、他の班がやらないものをしてほしいという心理などが班のなかにあり、微妙にゆれながら、結局、困難かもしれないけれどもおもしろそうなテーマを追求しようというところに落ちついていく。このあたりに、発言交流を通しての身体的感じ合い・触れ合いを経て、テーマをさぐりあい、模索し合い、なにかのきっかけで共鳴してテーマが決定するといった一連の流れが見られる。こうした過程を経て、テーマへの共同追求の身体的構えが形成され、班共同制作のスライドづくりが始動していくのである。

1班「三線」

この班は、おもしろそうな「三線」か、取材の

簡単な「紅型」か、どちらにしようか迷っていた。結果は「三線」に決まるのだが、その過程がおもしろい。以前から三線を弾いてみたいと思っていたのだけど、まだ自分の意見を言い合えるほどにはなっていないで、言いだせずにいた。おくれてやってきたA君に「サンシン」か「紅型」かを聞いたところ、「サンシンちゃん！」という一言がでて、それを契機に「サンシン」の方向にまとまりだした、というのである。本土出身の男子学生は三線に興味をもち、いろいろと調べていたのだが、発言力のある女子学生たちの前で言いだせず、A君の一言でまとまりだした、というのである。そこには、本土出身の学生が、本土からみて三線がおもしろい、沖縄の音楽には三線がつきもので、まっさきに三線が思い浮かぶことに不思議な思いをいただいていたということがある。沖縄出身の女子学生は、本土出身学生の興味から逆に三線をとらえ直し、意外とおもしろいかもかもしれないと感じて、賛成したのであろう。また「男の子もさらに乗り気になっているし、みんなもこのテーマに賛成である」ということで女子学生もこのテーマに賛成したのであった。こうして、1班は「三線の製造過程と由来」にテーマを決定した。

2班「ちんすこう」

ちょうどこの時期に沖縄産業まつりが開かれていて、この班のメンバーはそこに行ってパンフレットをもらってきた。そのなかから「パイナップル」「ちんすこう」「三線」「琉球ガラス」の4つがテーマとしてあがった。そのうち他の班との重なりを避けて、「三線」「琉球ガラス」は脱落した。「ちんすこうはどうやってつくるの？」という疑問に沖縄出身学生もうまく答えられない、「焼くんじゃないの？」「揚げるんじゃないの？」という意見がでてきて、はっきりしない。こうして、「ちんすこう」を調べたいという気持ちが高まっていった。授業担当者の方で、以前の経験からお菓子には（製造上の）秘密があって、取材させてくれないこともある、と助言すると、不安に思いながらも「知りたい」という気持（知的追求心）が強く、「ちんすこう」にテーマを決めた。

3班「おきなわそば」

この班も「沖縄戦」「奇跡の一マイル」「紅芋」「シーサー」「琉球ガラス」「三線」「壺屋焼」

「ちんすこう」「さとうきび」「国際通り」「沖縄そば」などがテーマとしているのに、なかなかテーマが決まらなかった。他の班はもうコンテづくりのりだしているのに、まだテーマが決まらない。焦りはじめた。「沖縄戦」「奇跡の一マイル」は写真・資料を集めてスライドにするのが困難ということで消え、「ちんすこう」「琉球ガラス」「三線」は他の班がやるという情報が入ってきて消えた。「紅芋」は気乗りがしないということで、いつのまにかなくなっていた。「シーサー」はあまりにも沖縄すぎるということで否決された。残った「沖縄そば」というテーマも、皆、イザ決まったら乗り気ではないような雰囲気であった。そのとき、沖縄そばが「案外やりやすく、内容のあるものになりそうだ」「本土のそばと比較でき、歴史もちがう」と誰かがいったことから、皆いろんな意見をいった。「確かに沖縄そばは、見た目が全然、日本そばとちがう」「豚肉が入っている」「麺が脂ぎっている」「まずい」「おいしい」など、さらに沖縄そばを家庭教師先でだされたときの思い出などをだしあって、話は盛り上がった。こうして、3班のテーマは「沖縄そばができるまで」に決まった。この班において、消去していった、最後に残ったテーマも気乗りがしないという点がおもしろい。身体が動かないのである。そこで、このテーマのおもしろさを本土そばとの比較から検討していけると身体で共鳴したときに、テーマが決まったのである。こうして、身体が動いてその気になり、テーマが決まるということが大事になるのである。

4班「琉球ガラス」

この班では、「琉球ガラス」「壺屋焼」「食べ物」などいくつかテーマをあげたが、「価値性」という点でじっくりこない。だんだんと会話がとぎれがちになっていく。今度は「興味」という点で話し合いをした。すると、一つひとつあげるたびにどれもやってみたいテーマになって、どれを選んだらよいかわからなくなってしまった。取材のしやすさとともに、「自分たちでもつくれる」ということをどこかから聞き、「ガラスを実際につくってみたい」という声が多く、この2点から「琉球ガラス」に決定した。他の班が別のテーマをやるので、すぐに決まったのだが、「4班の人

たち全員が、なぜかこのとき、あの美しい琉球ガラスのイメージを自分の心のなかに描いているようで、頭の中は、美しいスライドの光景が、はやくもできあがっている状態だった」し、「絶対、琉球ガラスしかないという思いが4班にあったような気がする」と述べている。ここでも、作品の「価値性」よりも、「ガラスを実際つくってみたい」という欲求、取材の容易さが勝り、「これしかない」という思いで一致していたことが班共同制作の構えを強固にしていったのである。このテーマで身体が動いたのである。

3. 取材と撮影・インタビュー・録音

取材・撮影などの活動はフィールドワークである。地域にでかけていき、テーマに携わってきた人たちを訪問し、制作活動と過程を観察し、その制作者の仕事への情熱を肌で感じ、その思いを写真(スライド)・インタビューをとおして表現していくことが求められる。行動をとおして肌で実感し、何かをつかみ、それを写真(スライド)・インタビューで的確に表現することが求められる。身体を動かして、皮膚感覚でつかんでいく活動はきついが、こうした活動のなかで、製作者の身になって感じ、考えることができるようになる。製作者の側に身をおくことができこそ、スライド作品は生きて視聴者に伝わっていくのである。この活動をうまくこなすには、さまざまなことに班で共同して取り組むことが必要である。共同活動なしには、うまくいかない。まず取材先をさがし、取材の承諾をとることが必要である。このときに、各班では「タウンページ」からさがす、「知り合い」に聞くなどをしている。今回の班活動において、多くの班が「知り合い」をとおして取材場所をさがし、有名な大企業ではなく、比較的小規模な製造所をさがし、手づくりに近い制作活動を見だしているのは、優れているといえる。各班はさらに、発表会までの見通しをたてながら、取材日程を立て、班員の都合を調整し、できるだけ多くの班員が参加できるようにし、できなければ少数でも実施していくことに取り組んでいる。インタビュー事項を班で出し合って決める。調査箇所が多ければ、班を二つに分けて効率的に取材・

調査し、重要な箇所においては、できるだけ全員参加して取材・調査することが必要であるが、その点をどう加味しておこなうかは、班員どおしの共同状況に左右されてくる。また、実際の取材(撮影・インタビュー・録音)においては、必要機材の準備・点検が不可欠であり、また撮影をだけがおこなうか、インタビューはだれが担当するか、録音はだれが担当するか、などを事前に決めておき、呼吸を合わせて取り組まなければうまくいかない。このように、さまざまな場面・状況において班員相互の関係をきりむすび、共同して活動することが求められる。この共同活動をとおして、スライド作品づくりに取り組む集団が形成されていき、その形成度につれて、スライド作品が的確にできあがっていくのである。この点で、身体・関係・共同の創造が身体全体で、皮膚感覚で求められ、それをとおしてスライド作品づくりへの一体感が形成されていくのである。きついかいでも、活動をとおして身体・関係・共同の創造が適切になされれば、スライド作品づくり集団の形成が急速に進んでいくのである。この局面はそれだけに重要である。各班はこの局面にどのように取り組んだかを以下で班ごとにみてみよう。

1班「三線」

テーマが決まると、Aくんは「タウンページ」でさがしてみる。Bくんは近くの三味線店に声をかけてみる。Cくんは知り合いをとおして聞いてみる。Dさんは、友人の父が県立芸術大学の三味線講師をしているので、その方に聞いてみる。このように、班で手分けして取材先を見つけていく。Dさんは友人に電話して友人の父から交渉していただき、OKを取ることができた。紹介してもらったところは、おじいさん一人で無理をしないで趣味程度に作っているところだという。

「三線の製造過程と由来」について、それぞれ疑問に思っていること、調べたいこと、工房で聞きたいことを班で出し合った。工房での質問事項に関して、ある班員は、「蛇皮の入手経路、買入手はどんな人か、どれくらい売れるのか、手入れの仕方、後継者問題、など次々と皆で考えているうちに熱心さが増すような気持ちであった。具体的に作業を進めていくうちに、団結していくということが久しくなかったな、とふと思う。」と述

べている。また別の班員は、「三線について、私一人では2・3の質問しか思いつかなかったのだが、班員8名の知恵を集めるとそれぞれの視点、角度から三線を見つめているというような感じで、この三線という一つの事項に対し、これだけの質問が連鎖反応のようにぼんぼん飛び出してきたので、グループのパワーにはすごいものがあると、今さらのように感じた。このときに、スライドづくりに対する私の『不安>期待』という気持ちが『不安<期待』というように逆転したように思う。」と述べている。

取材は、班員の日程を調整して12月18日に決めた。調査場所が多く1日ですべて廻るのは不可能なため、午前中二つのグループに分かれておこない、そのあと三線工房に訪問している。午前中、那覇グループは県立博物館、首里城などの撮影にでかけ、読谷グループは赤犬子の碑文、読谷村立博物館、三線発祥地の撮影をおこなった。午後2時に那覇市で合流して工房に出かけることにした。このように、二つに分かれて、効率的に取材することを計画していることに注目したい。

那覇グループでは、まず県立博物館に行くが、「2階には、スペースの一角をすべて三線の説明、展示が占めており、これを見て私たち4名は狂喜した。早速、撮影許可を取り、カメラをもって撮影に取りかかった。……博物館のスペースの一角をすべて三線が占めていたことで、改めて沖縄の文化の一つに位置づけられる三線の大きさを感じた。」と述べている。読谷グループでは、読谷村立博物館において、「三線をガラス越しに展示してあるため、フラッシュをたくと、反射してしまい、きれいに写らないのではないかと心配した。そこで私たちは、係の人に頼んで、少しの間だけガラスをあけてもらうことにしたが、係員は頑固で、許可はおりなかった。」と述べている。三線の由来などを知るにつれて、感銘を深めた。(午後の合同での取材は、工房のおじいさんの風邪のため取材できずに終わった)

制作過程の撮影は都合により1月になった。県立芸術大学講師の方が同行し、人工皮を使って実際に制作していただいた。その過程で、三線の皮はニシキヘビを使っているとか、20枚セットで皮を買うのだがそのうち良い皮は1～2枚だとかの

新しい発見をし、制作者の苦勞を知り、三線の制作が身近に感じられるようになる。ある班員は、「お礼を言い、帰る頃には、私は自分がサンシンに関して前より身近に感じ、そして好ましく思っていることに気づいた。他のメンバーもサンシンを習いたいといっていて、応援する気持であった。」と述べている。三線の制作過程をたどり、三線にまつわるさまざまなことを聞くにつれて、三線制作者の身になって三線を感じ、身体的共感をおぼえるようになったのである。このことが、三線の制作過程を中心としたスライドづくりにとって重要になるのである。

2班「ちんすこう」

文献の調査を行ったが、「ちんすこう」について言及しているものは少なく、「あまりの資料の乏しさに苦勞し、ますます『ちんすこう』を知る価値を実感していった」。

取材交渉は、何人かで手分けして行った。電話での取材交渉では断られたところも多く、取材交渉が不調になることを想定して、班員の家の近くの「本家新垣ちんすこう店」に行き、交渉したが、意外にも断られなかった。いま年末の大量生産で忙しいので1月になればOKということだった。ところが、班にもちかえり検討したところ、1月では日程的に苦しく、他の「ちんすこう製造所」にあたることにした。おみやげ店に並べられている「ちんすこう」の製造会社を調べ、3・4の会社に絞り、取材交渉を試みた。最初に電話したのが、何種類もの「ちんすこう」をつくっていて興味深い南国製菓であった。こちらの趣旨を伝え、取材の許可をいただくことができ、下見の日程を決めた。この過程で、「取材を行うまえにきちんとした段取りを踏むこと、こちらの趣旨を明確に伝えることの必要性がわかった」。断られたり、承諾されても制作日程が合わず断念した経験は、取材の難しさを知り、良い経験となっている。

12月18日に南国製菓に下見に行き、事前にまとめた質問事項を聞いて、お話を伺い、作業の様子を見て、最後に「ちんすこう」のおみやげまでもらい、「ここまでしてもらったら良い作品を作らなければならないと思った」。

撮影は工場班と空港班に分かれて行った。この分け方は合理的のようにも思えるが、先に1班の

分け方と比べてみると、「ちんすこう」の製造過程はスライド作品の中心的位置を占めるので全員でおこなった方がよい。このことを考えると、1班のように、ちがうところを分けて取材・撮影し、そのあと合流して製造過程を取材・撮影する方法をとると良かったように思われる。空港班では、おみやげ店に並ぶ「ちんすこう」の写真、「ちんすこう」を買う観光客を撮るのだが、タイミングが合わず苦勞した。工場班では、工場長にマイクをむけ、質問したが、5分もすると質問事項がなくなり、苦勞した。撮影は一部の企業秘密の箇所をのぞき、ほぼ撮影できた。

この班では、こうした取材（下見、本番）の過程で感じたことをていねいに書いている人は一人しかいなくて、取材の過程で、製造者のがわの身になって考えたり、感じたりしているところはあまり見られなかった。しかし、下見と本番をとおして、思ったよりも小さな工場で「ちんすこう」が作られていて、意外に手づくりに近いということを知ったり、製造過程で思わぬことに気づかされたりして、「ちんすこう」を身近に感じ、また菓子製造の特質にまで一般化して考えたひとも多かったように思われる。

3班「おきなわそば」

観光ガイドブックを見ているうちに、どの店がおいしいかという話題になり、「さくら屋」に行こうということになって行って見たが、おばあさん一人でやっていたその店はやめていた。「さくら屋」に取材できなかったので、もう一度構想を練り直すことになった。大手そばメーカーに電話で取材を申し込んだが、運悪くこの日はできないといわれた。班員のひとりの遠い親戚がそば屋と製麺工場を経営していることがわかり、そちらでそばの製造工程を取材できるという吉報がはいった。そこで、工場に下見にいった。工場が狭く、5名全員ははいれず、ゆでめん・蒸しめんの製造過程について3名で説明をうけたが、初めて知る見るものばかりであった。全体として、「機械でやっているとはいえ、何となく手づくりでやっているような感じがした」。「おおまかな流れはつかむことができた。今日はこれだけなので次回のアポイントメントをとって帰ることにした。撮影台本の作成、撮影がうまくいくような気がして前途

洋々とはこんなことを言うんだなあと思っベッドに入った。夢の中にも出てきそうだった。」。

夜八時から製麺作業が始まると聞き、班（4・5名）でその時間に撮影の下見に行った。この取材・撮影では撮影・録音機材を持ち込み、班員で手分けして取材箇所を分担した。機械の説明を受ける人、機械の音を録音する人、写真を撮る人などに分かれた。それぞれ緊張した顔つきでやっていた。この班の分担において、作業音を取る人をいれておいたのは、さすがである。このことが、あとの録音に役立ったのである。録音にあたっては、製麺所の方の協力があつた、うまくいった。

生地での製造では、普段使っている小麦粉が、いくつかの段階を経て麺らしくなっていく過程がよく理解できた。「なにげなくつるつると食べているあの麺はこうしてつくられているのかと感心してしまった」。蒸しめんでは、「おばあさんたちは、慣れた手つきで蒸し終わった麺を次々と袋詰めしていく。長年の勤からか、おばあさんたちが一度に手に取る分量はどれもほぼ同じで正確なのである。」と、それを見た班員は述べている。

10時すぎには、ゆでめんの製造にはいり、ゆでめんには手打ちの工程があり、ある班員は製造工程に参加させてもらった。結構コツがあることがわかった。「手揉みの工程では、何人かが体験させてもらったが、なかなか力のいる作業で、悪戦苦闘していた」。撮影を終了したのは、午前2時であった。

3班は、手づくりに近い製麺所で製造工程を観察するなかで小麦粉から麺までの工程を具体的にイメージでき、また、手打ちの工程に参加し体験するなかでその大変さを実感できた。身体をくぐって製造工程を自分のものにしていく。こうして、身体的実感をもったためか、夜遅くからのかなりきつい取材・撮影にもかかわらず、無事にこなし、それなりに満足感をいだき、これならうまくいきそうだという感じをもったようである。このときの身体ごとの感じについて書いているものはいないが、おそらく、「これでうまくいく」という手ごたえを感じとったであろう。

4班「琉球ガラス」

4班では、テーマが決まり、取材先を決めることになったが、琉球ガラスをやっているところは

たくさんある。南部、読谷村、恩納村のガラス工場が候補としてあがった。「いくつかの工場を比較してはどうか」という意見もあったが、一つのところを徹底取材した方が能率的だし、相手にも迷惑がかからない、ということで一つの工場にした。班員の一人が「科学技術庁長官賞を受賞した宮国次男さんに会って取材したい」と言い出したことから、恩納村にある「共栄ガラス工房」に決まった。

電話で取材の趣旨を告げると、「いつでもいいですよ」と快諾していただいた。12月15日に取材に行くことにした。この日は平日で、授業が入っている人もおり、二時限終了後に行ける人と、三時限終了後に行ける人とに分かれて、現地にむけて出発した。途中道に迷ったグループもあったが、無事到着した。このとき、宮国さんへのインタビュー内容を書いたメモを忘れてしまい、その上録音機器（ウォークマン）が故障していた。せっかく本人に会えたのだけど、直接本人にインタビューできなかった。残念である。

到着後すぐにざっと見て廻り、店員の方に、客層や琉球ガラスの始まりなど聞き、琉球ガラスについての理解を深めた。「購買客の割合を聞いただけなのに、店員さんはたくさんのことを教えてくれた。……あとで知ったことだが、この人は社長さんでしかも宮国さんの奥さんらしい。」

先発のグループはすでに美しい琉球ガラスを撮り終えていた。あとは製造過程の段階を撮影するだけになっていた。ある班員は、「これは、スライドの重要な部分を占める映像なので、失敗は許されず、班員の全員に独特の緊張感が流れていた」と述べている。工房では4・5人の熟練した職人さんが働いていた。「人気の高いハイビスカスやアサガオ、ユリの置物などの装飾品が、釜のあちらこちらで無残におかれており、もったいないような錯覚にとらわれていたのも事実である。」「ベテランの職人さんが琉球ガラスを作り上げるスピードは、カメラの撮影も追いつかないほどで、あっというまの早業であった」と述べている。職人さんたちは、琉球ガラスを作りながら、親切に琉球ガラスの製造過程の様子を話を交えて教えてくれた。話を聞きながらメモを取り、聞きのがさないように気をつけた。

ただ漠然と琉球ガラスの製造過程を見るのももったいないので、かねてからの希望であったコップづくりに挑戦することにした。値段は三千円で、みんなでだしあってやってみることにした。コップづくりに携わった班員は次のように述べている。

「ある程度の流れはつかめたつもりだったが、いざ作ってみるとなると緊張してしまう。……溶解がまのなかのガラスはドロドロとしていて飴のようだった。それを鉄パイプでからめとり、吹きガラスをやるのだが、結構力をはいる作業で何度も『もっと強く』と言われ、ほったたをふくらませながら頑張った。水に一瞬つけることでヒビワレの模様をつける。形を整える作業が一番細かく、あとになって思い出すのに苦勞した。飲み口のザラザラをなめらかにしたり、コップの底を平らにしたりとパッパッと進み、これは何の作業だろうと思う間もなく終了した。この間五分くらいだったと思う。」

見ていた班員は、「取りかかって、五分もたたないうちにすっかりコップはできあがってしまった。すごいと思った。」「手づくりガラスといっても、私が見た限りでは六割がた向こうの職人さんの手を借りていて、ただガラスを吹いているだけのように見えたが、やった本人はそれでも肌で何かを感じ取ったみたいだった。」と述べている。

宮国さんへのインタビューは、別の機会におこなったが、そのときには、前回のような失態をしないように、撮るべきシーンをきちんと把握し、テープレコーダーもきちんと動か確認したうえで、現地に向かった。インタビューでは、「琉球ガラスを始めたきっかけと、琉球ガラスの魅力は？」に的をしぼり、聞いた。質問をしたのは一回だけで、琉球ガラスをはじめたきっかけ——琉球ガラスの歴史や成り立ち——これらの琉球ガラス、と30分近く熱っぽくしゃべって下さった。このインタビューをとおして、「ガラスの神秘さに魅せられ、この道一筋に歩み続けた宮国さんは、ガラスに対する情熱と、常にガラスの可能性を追求し研究する姿勢をもっている人だということ強く感じた」し、「何か一つでも自分の打ち込めるものをもつことは、こんなにも人を輝かすことができるのだ。とてもすてきなことだと感じずにはいられなかった」。

「共栄ガラス工房」での取材をとおして、ある班員は感想を次のように述べている。「最初取材にきて琉球ガラスに対する思い入れが深くなったとでもいうのだろうか。一つ一つの作品を見ながら、炎の雫から生まれるガラス職人さんの技と愛情と情熱がオーバーラップしてしまうのである。」。こうして、ガラスの背後に、その製造に携わる職人の技・心を感じ、おもわず琉球ガラスに思い入れをしてしまう。琉球ガラスの製造に身体次元で共鳴でき、そのことが深い思い入れを生んでいくのである。このことに注目したい。

4. 編集・ナレーション録音

先の局面で取材（フィールドワーク）し、夢中で撮影・インタビュー・録音したが、うまくいっている保障はない。視聴覚メディア作成技術（スキル）がなければ、うまくいかない。いくつかの班は、フィルムが空巻きになっていて、取り直したり、取り直しができずに使えないで終わったりしている。しかし、失敗は成功のもとである。失敗して痛い目にあって初めてわかることも多い。失敗にめげないで、すばらしいスライド作品の制作をめざして頑張ることができるのは、これまでの過程で班共同の関係が形成されていればこそであり、班員どおしの信頼関係が形成されていればこそである。そして、それをとおしてスライド作品の制作に取り組む学習集団が形成できればこそなのである。とくに三班において、他の班に著しくたちおくれ、作成過程でもいくどにわたる失敗にめげず、ともかくスライド作品が完成できたのは、先の（撮影、インタビュー、録音）過程できずきあげられた共同関係が基盤にあったからである。この点を見過ごしてはならない。

この編集・ナレーション録音において、先の局面に劣らず班共同が必要とされる。コマの選定には、制作過程に参加した班員どおしでさまざまな角度から検討することが必要である。捨てるのは惜しいという気持ちをもちながら、共同で必要な限りでコマを選定するのである。さらに、コマに合った解説文（ナレーション）を考えだす必要がある。このとき、先の取材での役割分担を生かした分担も考えられるし、誰かが原案を考え、それ

をみんなで検討していくという方法も考えられる。いずれにせよ、班で共同して取り組むことによって、よりよい解説文（ナレーション）ができあがるのである。実際の録音においては、班員の都合の良い日時を設定し、また録音場所（教育実践研究指導センター）を予約し確保する必要がある。さらに、録音機器操作の技術が必要になる。それなしにはうまくいかない。こうして、この局面でも新しい共同が必要だが、それはこれまでの局面で共同関係をつくりあげていけば克服できるものである。これまでの活動のなかで、各班は共同関係をきずきあげ、一体感を生み出し、うまくのりきっていていることに注目したい。

1班「三線」

スライドが現像されて、返ってきた。うまく写っているかどうか不安であったが、博物館で写した三線年表など一部を除いて、思ったよりきれいに撮れていた。壁に写した一コマコマに歓声をあげながら見ていた。どれも苦勞して撮影したものばかりだし、どれも使えそうなものばかりだったので、取捨選択するのに苦勞した。あれこれ言いながら何とかコマの順番を決めた。

次は解説文（ナレーション）を考えることにした。解説文（ナレーション）は、学科ごとに三つのグループに分け、それぞれ考えてくることにした。そのさい、実際に撮影に出かけたところのナレーションがやりやすいので、そうなるように割り当てた。この分担の仕方には、これまでの共同学習の利点が生かされている。①これまでのフィールドワークにおける分担の成果を取り入れて、グループ作業の有効性を感じて個々の人ではなく3人ごとの小グループに分けて行っていること、②グループ分けのさい実際にフィールドワークに関わった場所のコマについて割り当てていることに注目したい。

次の週、宿題にしていた解説文を持ち寄って、最終確定をした。この解説文の推敲についてある班員は、「一人では思いつかなかったことが何人か集まると進めることができると思った。ここはこうした方がよい、その文はいいね、などとわかりやすい文をめざして努力した」と述べている。推敲過程で、班で検討しあうことの良さを改めて実感している。この推敲過程を経て、Aくんは思

わず、「みんなが書いた解説文をワープロで打つてくると自分から言いだしてしまった」と述べている。身体が反応してしまっていたのである。

次は録音である。前もって機器の使い方をセンターの人に習っていたが、いざ準備しようとするときすっかり忘れてしまい、あわてふためいた。ようやく録音するまでにいった。ナレーションの読み上げはだれがするかとなった。みんなやりたくないものだから、結局じゃんけんで決めた。コマ切替え係、BGM係、ラジカセ操作係など、係分担が自然と決まっていき、協力しながら録音をおこなった。2時限目から開始したのだが、予想外に時間がかかり、3時限の授業にいくいこんでしまったという。このあたりに、見通しの甘さがあるのだが、これも経験してみないとわからないことなのであろう。

ナレーションの読み上げを担当した班員は、試写しながら、「自分の声やナレーションに少々落ち込みながらも、これまで行ったことをいろいろ思い出しながら作品を身終わったら快い満足感がおしよせていた。よく頑張ったなどお互いにごくろうさんと言いつく瞬間、何かを作るといふことのおもしろさに魅せられた。」と述べている。他の班員も同じようなことを感じたことだろう。

2班「ちんすこう」

2班は、空港で撮影したはずのフィルムがうまく入っておらず、空巻きになっていて、あの撮影は失敗に終わってしまった。ある班員は「あんなに頑張っただけで恥ずかしい思いまでしたのに水の泡なんてあんまりだと思った」と述べ、別の班員は、「空港での恥ずかしさに耐えながらの撮影や一人でおこなった撮影が全てだめになってしまったことにショックを隠しきれなかった。先生の『失敗は成功のもと』という言葉に頼りに再度撮影することを決め、失敗したものよりいい写真を撮るぞと決意した。」と述べている。また工場でのインタビューは、指示語が多く、意味がわからないということで使わないことになった。

こうして作業におくれがでたのだが、気をひきしめて、必要作業を分担して頑張ることにした。教育学・3年次は写真の撮り直し、歴史・お土産店の部分のナレーションを考える、教育学・2年次は題名・製作者名・工場名・ちんすこうの種類

を模造紙に書く作業、情報教育3・4年次は製造過程のナレーションを考えることにした。ここでも、ナレーションは、撮影を担当したものが担当して小グループでおこなっていることに注目したい。この方が良いものができるのである。

ナレーションをもちより、みんなでき文章に直した。ことばづかいなどに気を付けて一通りの解説文ができあがった。こうして、あとは録音を待つだけだ。録音では、ナレーションは女子の班員が引き受けてくれ、夜8時から班員のアパートでおこなった。撮影し直したスライドができあがり、それを組み込んでスライドの順番を確定した。予定していたものと食い違いがあり、新しくスライド・コマを追加することになり、録音のし直しになった。再度の録音において、2・3回取り直したあと聞いてみると、雑音が入っていて聞き取りにくいことに気づいた。別の小さいテープレコーダーを試しに試してみると、驚くほど音を拾っていた。物は外見からだけではわからないものである。何度か取り直して録音した。

3班「おきなそば」

年があけ、編集の日になって、3班は思わぬアクシデントに出会った。スライドを預っていた班員が成人式で帰郷してしまい、彼の部屋にスライドが置かれたままになっていたのである。その日は何もできず、活動停止状態になった。他の班の活発な活動をうらめしく、くやしき思い、指をくわえてただ時間の過ぎるのを待つという状態であった。このときがきっかけで、他の班に大きくおくれしてしまった。

1月18日にスライドのチェックをした。うまく撮れていてよかった。ところが、インタビューもまだしていなくて、急ぎょインタビューに行くことになった。ある班員は、「まだまだ時間はあると思っただけで一週間、二週間と経ち、発表が来週と迫っていたというのが、われわれの班のメンバーみんなの気持ちだろう。」と書いている。遅れを見て授業担当者の方が発表会を一週間延ばし、この一週間に3班は仕上げることになった。

ナレーションは2人ずつ組んで、手分けして考えた。ペアになった相棒が忙しくて結局一人でしあげたりして、チームワークがうまくいかなかった。1月25日にインタビューに行き、1月27日に

録音テープを他の班の人にわたしたのだが、1月27日編集作業をしに出てきたところ、肝心のテープがない。先生にわたしたという。先生は技官の人にわたしたという。1月31日、教育実践研究指導センターで編集作業を開始。5時頃から作業開始するが、編集機器の使い方がわからず、閉室の6時になり、途中で終了する。2月1日、前日に要領をつかんだためかスムーズに作業が進む。3時頃にはじめて6時頃作業を終了した。ナレーションの読み上げをした班員は録音について、「何度もやり直しながらの収録だった。ここで私が思ったことは、全員がどこでマイクを入れ、どこでBGM・効果音をいれる、といったような内容をしっかりと把握していないからこういう事態になるのだということである。こういったことは作業をスムーズに進めていく上で大切なことだと思う。」と述べている。担当者相互の呼吸が合わないとなかなかうまくいかない。身体的呼吸の一致がここでも求められるのである。2月2日にナレーションの手直し、完成品の試写をおこなった。「全員で試写をおこない、それが終わったときはとても充実感で溢れていた。一つのことを仲間ですらやることの嬉しさを実感した」。次の日は発表会である。

4班「琉球ガラス」

スライドが現像されて、返却されてきた。写りはよく、取り直すほどの失敗はなかった。工場内での撮影が暗かったのが残念だが、周りを暗くしたら大丈夫のようで一安心である。必要なコマを厳選するのだが、グループ全体でコンテと照らし合わせてみて、同じ場面でも何枚か撮影していたのでそのうちどれか一枚にしなくてはならず、苦勞して撮影したことを考えると捨てるのが惜しくなってしまう。ある班員は、「余りにも写真を多く撮りすぎていたため、一つのシーンに付き、多いもので4・5枚もあったため、シーン別にスライドを選ぶという作業に、授業1時間分使ってしまった」と述べている。思ったより時間がかかったのである。

それだけではない。必要とされる写真が欠けたり、不鮮明であったりして削除したりで、シーンを削ったり、その削った分のナレーションをどこかに組み込むなどして、大幅にコンテの内容を

変えなければならなくなった。ナレーション作成では、何人かで分担してやると表現方法が違っていたりして大変だということで、ガラスの実体験者に委ねることになったのだが、彼女によれば、「1カ月近くも前の記憶をなんとか絞りだしながら、少しのメモを頼りに構想を練っていくのは、決して楽ではなかった」。ナレーションは彼女の作成したものをもとにみんなで話し合いをしていくうちに曖昧だったところは次第に明確になった。ここに、みんなで検討することの必要性と有効性が示されている。

班共同に関して、ある班員は、「スライドづくりもこの編集の段階に入ってくると、みんながそれぞれの役割を見つけて頑張っていることが痛感できた。今までの取材ではみんなが揃うということがなかなか難しく、仕事も誰かにまかせてしまうということがあったのが、コンテの文章を直している人もいれば、スライドの選別に頑張っている人、宮国氏のインタビューのどの部分を使おうかと入念にチェックしている人など、班員みんなが最後の山である録音に向けて本当に頑張った。」と述べている。これまでの、班での共同制作の活動をとおして、互いの気持ちがつながり、それにともなって仕事のできぐあいを見ながら各自で役割分担も自然におこなわれるようになっていったのである。こうした班共同の高まりがあってこそ、うまくいくのである。

録音では、最初は思うようにナレーションの声を録音することができず、四苦八苦の連続だった。ナレーションとコマ切替えの音とが合わなかったり、ナレーションが失敗したりで、やり直しを何回かした。おまけに、仕上げあとで点検してみると、ずれが見つかり、その場で急投やり直しをすることになった。録音はけっこう大変だった。

しかし、この最大の難関である録音において班共同の力が発揮され、乗り切っていったのである。ある班員は、このときのことを、「この録音のときは、まさに班員みんなが参加して、そしてそれぞれが頑張ったことを実感できた瞬間でもあった。ナレーションを読む人は『失敗してはいけない』という大変なプレッシャーの中、何度失敗しても弱音をはくことなく頑張っていた。スライドが変わるタイミングを合図する人も、ナレーターと綿

密な打ち合わせをして、タイミングをはかっていた。その他にも、音響は音量の調整や音の出だしや終わり方などに神経を使っていたし、録音機を操作する人もそれなりに頑張っていた。ナレーター以外は交代でやっていたのだが、実際に録音に携わっている班員はもちろんのこと、周りで見守っている班員も、まるで、自分が話したり、操作しているかのように緊張した状況の中で録音は進められた。」と述べている。そして、「成功したらみんな喜び、失敗したらみんな本気で残念がりながらも励まし合って頑張っていた。みんなそれぞれが一生懸命で、その姿を周りのみんなも感じ取っているから、誰か失敗したのを責めるでもなく、ただひたすら、目標達成に向かってみんな進んでいるという感じがした。こんな経験、なんだかとても久しぶりのような感じがして、みんながとてもいい仲間のような感じがして、録音を終えたとき、『やったー、やり遂げたぞー』という気持ちとともに、『みんな、どうもありがとう』となんだか思えてきた。」とも述べている。目に見えないが、「実際に録音に携わっている班員はもちろんのこと、周りで見守っている班員も、まるで、自分が話したり操作しているかのように」感じ取り、「みんなそれぞれが一生懸命で、その姿を周りのみんなも感じ取っている」ことが大切なのである。このあたりの感得が重要であり、班共同活動の副産物として得難い貴重なものなのである。

5. スライド制作を終えての感想

上記のような過程を経て、ようやくスライド作品は完成した。この過程で受講生たちは目に見えないところでさまざまなことを体験し、感じている。以下で、受講生の感想をいくつか取り上げ、紹介しておく。これらは一部にすぎず、多くのものが同じような感想をもっていることを付け加えておきたい。

「このスライドは、一人ひとりの協力があってはじめてできるものであると思う。みんなの力が一つに集まって、行動し、制作すると、こんなにも素晴らしいものができることがわかった。私が教師になったとき、このような共同の喜びを感じ

とれるようなことをしてみたいと思った。」(1班)

「将来、学校現場に立つ私たちにとってスライド制作を経験したことは、きっと役に立つだろう。知らないもの同士が一致団結して一つのものをつくりあげたことは、自分をひとまわりもふたまわりも大きくしたような気がします。」(1班)

「班の仲間と協力して一つの作品を作りあげることの充実感、そして何といてもこのスライドづくりで知り合うことができた人々との関わりを大切にしたいと思う」(2班)

「このスライドを完成することができたのは班のメンバーのおかげだと思う。これをひとりでやっていたらどうなっていたらと思う。この授業をとおして身につけたことが、学校現場にたどきに生かされるようにがんばっていきたいと思う。」(2班)

「年が明けてからは悪戦苦闘の連続であった。フィルムの管理に関する連絡の悪さ、機械への不慣れ、などはその代表格であろう。年が明けるまでは他の班より一歩リードしていた頃とはまさに対照的である。しかし、このようなハプニングによる艱難辛苦を乗り越えて発表ぎりぎりになって他の班に負けるとも劣らないような作品を仕上げることができたのは、ほかならぬわが班のチームワークゆえであろう。スライド制作を終えて、われわれはスライド作成の作り方や視聴覚教育の概念もさることながら、チームワークの大切さやなせばなるという精神を身をもって体験したように思う。実際に弱音をみんなの前でなく私の前ではいた人もいた。しかし、チームワークから生まれる励まし合いが作品の完成という大きな成功につながったのだと私は確信してやまない。われわれにさまざまなことを教えてくれたスライド作品のことは決して忘れることはないだろう。」(3班)

「このスライドづくりで、たしかに私は、スライド教材をつくる技術や教材に用いるときの心得やメリットなどを学んだ。しかし、それ以外にも、自分たちでこういった教材を作る喜びや苦しさ、またみんなで協力し合うことの大切さ・喜び、そして取材をとおして自分たちもより深く学ぶことができ、また多くの人と触れ合うことの喜びを感じることができた。／取材から編集までを自分で

やり遂げるスライド教材づくり、これは、教師が地域の中に飛び込んで地域と手を取り合うことができ、また実体験をすることでより深い知識を得ることができ、さらに子どもたちにも教科書の内容をただ伝えるだけの授業よりも、もっと理解させることのできる授業ができるという一石三鳥の教材だと思う。それはまた、これからの教育には必要な分野でもあるような気がする。」(4班)

「メンバー全員がなんらかの仕事に責任をもってやったので、充実した活動内容だったと思った。チームワーク賞をもらいたいなと思いました。いろいろ失敗したが、できあがったときは嬉しかったです。……また、メンバー以外の多くの人の協力を受けてひとつの作品ができあがった。私は琉球ガラスの職人さんの行っていた『なにかを作りだす楽しさ』がわかったような気がした。楽しい授業だったなと思いました。」(4班)

「楽しい授業だった」といっているが、みずから活動することの楽しさ、共同制作することの楽しさをいっているのだと思われる。授業担当者は節々に締めることを考えていただけなのだが、受講生たちが思ったよりもさまざまなことを学び、実感していることに驚き、学習体験の広さと深さに改めて思いを馳せている。

6. 身体・関係・共同の創造と班共同制作活動

これまでみてきたように、班共同活動の進展過程にともなって、身体・関係・共同の創造が高まっていく。いくつかの局面に分けて、みてみよう。

(1) 班編成からテーマ決定までの局面

はじめに、学生たちはスライド制作過程をテキストの記述、ビデオなどで学習し、またこれまでの過年度学生の制作したすぐれた作品をみて、こんな難しい高度な作品はとうていできないと気後れし、身体的な硬さが表情にでてくる。ところが、班のなかに知り合いがいたりして、このメンバーなら共同すればできるかもしれないという予感をもつ。このような身体的・感情的共同可能性の予感を基盤にして、テーマについて話し合っていくにつれて、さまざまな着想に触れ、こんな見方・考え方もあるのかと気づき、他者との感情的通じ

合いが深まり、気乗りがし、意気投合して、テーマが決まっていく。このときに、すでに制作の見通しがはいいこんでいる。制作の簡単なものにするのか、それとも少し困難でおもしろい・追求しがあるものにするのかで葛藤がでてくる。班のなかで、安易にすませようという勢力と、少し困難だけど頑張ろうという勢力とが抗争していく。今回の制作活動では、多くの班で、さまざまな着想のおもしろさに触れ、見慣れたものなかの謎に気づくにつれて、全体として、少し困難でもおもしろい・追求しがいのあるものにする方に傾いている。この傾きをじっくりと醸成していくことが必要になるのである。

(2) 取材・撮影・インタビュー・録音の局面

身体的・感情的通じ合いを基盤として、テーマへの意気投合が生み出されると、作品の筋を構想し、この構想にそって取材を計画し、撮影・インタビュー・録音をおこなわなければならない。ここでは、行動的活動が要求される。行動をとおして身体的共同を実感し、そうした実感を基盤としてスライド制作に深くはいいこんでいく。あらゆる情報を総動員して、班で手分けして取材先を探し、取材先と約束を取り付けなければならない。ここでは、取材の承諾だけでなく、班員の空いている時間を調整しながら日時を設定するといった、調整にともなう実務処理活動が含まれている。そうしたことの切り抜けなしには、うまく活動ができない。班員との共同が現実生活レベルで問われてくる。このことを中心になってやる班員がでてきて、他の班員も彼の調整活動に協力する態度がでてくると、班共同での行動は動き始めるのである。

実際の取材では、取材事項、質問事項を予め共同で検討し、ほぼ確定することが必要である。この点が今回のいずれの班でも弱い。さらに、必要機材の準備・確認・点検をすることが必要である。この点でも、やや弱さがみられる。ある班では、テープレコーダーに不備があり、カメラへのフィルムの装着が不完全であった。しかし、それでも、先の局面で培われた身体的・感情的共同が各班員のなかに強く形成されていたため、班のメンバーを二つに分けて、二つの班で分担して、時間的に

節約した取材をおこなうことができた。また、撮影者・インタビュー者・録音者などの分担がきわめて円滑におこなわれ、呼吸の合った取材活動ができたのであった。

テーマの追求に関しても、モノの制作過程を取材するなかで、実際に自分の手で制作に参加して身体的な実感を皮膚感覚で体験し、身体をくぐって制作過程をとらえるに至る。さらに、その制作に携わる制作者の話を聞くなかで、そのモノの制作に賭ける情熱と生き方に触れ、こんどはその制作者の側からモノをとらえることができるようになっていったのである。つまり、制作過程の認識と伝達表現の過程において身体がはいりこみ、身体をくぐった深みのある認識と表現へと向かっていったのである。このことが、所期のスライド作品の構想をより確かなものにしたたり、当初の曖昧で漠然とした構想をよりリアルなものにしていくのである。それは次の局面に有効にはたらいていくのである。

(3) 編集・ナレーション録音の局面

撮影したスライドが現像されて返却されてくる。意外にきれいに写っていることを知り、驚く。最近のカメラは全自動であり、昔のように写真技術はあまり必要ない。たいていのスライドはきれいに写ってくる。台本にそって、たくさんのスライド写真のなかから必要なスライド写真を選定し、一つの流れを形づくることが要求される。このとき、班員は取材場面を思い起こしながら、共通の体験を基盤にして共同で物語を構想していくのである。さきの取材での体験が強烈であればあるほど、このコマ選定の作業は印象深いものになる。この過程において、身体がはいりこんでいく。コマ選定と合わせて、ナレーションを書く仕事ができる。このナレーション作成では、さきの取材での共通体験を基盤にして、それをことばに表現することが求められる。体験から表現への移行である。この表現において身体が作品のなかにいっそうはいりこんでいく。さらに、それを班で検討していくなかで、見落としに気づき、ちがった見方も知り、物語が生き生きとした形にできあがっていくのである。

次は、ナレーションの吹き込みである。ここで

は、録音場所の予約が必要になる。そのときに、これまでの取材先の交渉の経験が生きてくる。実際の録音にあたって、機械操作の技術が必要になる。人に教えてもらったり、自分であれこれ操作してやっと使い方がわかってくる。さらに、この吹き込みの仕事はひとりではできない。ナレーションを読み上げる人はもちろんのこと、その他に、コマ切替えの合図をする人、音楽をいれる人、録音機を操作する人、がそれぞれの仕事をきちんとこなすことが必要だが、それだけでなく、互いに呼吸を合わせて行動することが求められるのである。呼吸を合わす機会はこれまでの取材活動でも存在したので、それを生かすことができればうまく進む。何回かやっていくうちに呼吸が合ってきて、録音がうまくいくようになる。この過程で、少しでも失敗があれば、まとまった箇所でもやり直しが必要になる。まちがいやずれをチェックする人が必要なのだが、そのことに敏感に気づく人がいれば、吹き込み作業はうまくいく。録音において呼吸が合い、気乗りすれば、少々の失敗は乗り切れるのだが、呼吸がなかなか合わず、気分がだれてくると、この程度でよいのではないかと安易さに流れてしまう。この呼吸の合致と気分の高揚が重要になる。3～4時間をかけてナレーションの録音は終了となるのである。

以上三つの局面に分けて、班共同制作過程にそって身体・関係・共同の高まりをみてきた。2カ月にわたる班制作活動なのだが、その過程で、身体・関係・共同の機会はたびたび存在し、新たな機会において対人的関係の結び方、共同行動の仕方、着想の出し合いとそこでの異質な見方の摂取などに慣れ、習熟していく。こうして、しだいに、身体・関係・共同の高まりが生まれ、スライド制作過程においてたびたび遭遇する困難な課題にもめげず、みんなの共同によってのりきることができたのであった。

こうしてみると、スライド作品をつくるというメディア制作活動において、スライド作成の各段階にそった作成技術を教えることも大事だが、そこばかりに目を向けるのではなく、スライド作品の作成にとりくむ集団を身体・関係・共同という視点を軸にして形成していくことに力を注ぐ必要

がある。表には現れにくいけれども、そうした集団に支えられて、視聴覚教育的経験は深く学習者に刻みこまれていくのである。2カ月にわたる学生たちの班共同制作の取り組みはこのことを教えてくれているように思われる。

注

(1) 本報告は、藤原幸男「身体論的・関係論的授業指導論の構想」『琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第1号、1993年11月、を「身体と班共同学習活動」の視点から発展させようとして、この視点から「視聴覚教育」講義におけるスライド制作活動の過程を検討したものである。

なお、参加と学習の統一的展開の視点から、共同学習活動について考察したものに、竹内常一

「学習論のなかの子ども」『季刊、人間と教育』第1号、1994年3月、労働旬報社がある。そこでは、小学校社会科における実践事例を取り上げながら、「子どもたちは、これらの批判的な学習の方法とスキルを駆使して、これまで現実のなかに埋め込まれてきた自己＝身体を取り戻し、それを現実を意識的に参加させることができるようになってい」とし、「子どもたちは、M・ポラニーがいうように、身体を基軸とするスキル（技能）とアーツ（技芸）をつうじて現実のなかに潜入・参加し、現実を知的に認識していったとすることができるだろう」と述べている。（同論文、45頁）。本報告は、このような視点を共有しつつ、スライドの班共同制作活動において、「身体と班共同学習活動」の動態を明らかにしようとする一つの試みである。